

Sophia-R

Sophia University Repository for Academic Resources

Title	構造主義およびポスト構造主義を用いた看護学研究の海外動向：看護を新たな視点から見るために
Author(s)	山村, 岳央
Journal	上智大学総合人間科学部看護学科紀要
Issue Date	2024-03
Type	Departmental Bulletin Paper
Text Version	publisher
URL	https://digital-archives.sophia.ac.jp/repository/view/repository/20240321306
Rights	



上智大学
SOPHIA UNIVERSITY

総 説

構造主義およびポスト構造主義を用いた 看護学研究の海外動向：看護を新たな視点から見るために

Overseas trends in nursing research using structuralism and poststructuralism: in order to see nursing from new perspectives

山村岳央 上智大学総合人間科学部看護学科

Takeo YAMAMURA, Department of Nursing, Faculty of Human Sciences, Sophia University

要 旨

「人間の自我や主体はあらかじめ存在するものではなく、人間を取り巻く社会構造から影響を受けてはじめて形成される」と考える思想上の立場は構造主義やポスト構造主義と呼ばれ、海外では看護学分野での受容も進んでいる。本稿では、近年海外で発表された構造主義もしくはポスト構造主義に基づく看護学研究のレビューを行った。2020年から2022年の間に発行された22本の英語論文がレビュー対象となり、「社会的マイノリティ・弱者に焦点を当てた研究」「社会に存在する規範や偏見を批判的に検討する研究」「看護師と他職種や看護の対象者との間での支配・被支配関係を分析する研究」などでポスト構造主義の理論、特にM. フーコーの理論が用いられ、また非常に多彩な方法により研究が行われていることがわかった。ポスト構造主義や構造主義の理論を用いた看護学研究は本邦ではこれまでほとんど存在しない一方、海外では豊富な蓄積がある。これらの理論を本邦看護学にも導入することで、斬新で深みがあるだけでなく、これまで誰も正当性を疑わなかった看護の方法に対して根底から疑問を提起するなどの意義をも併せ持つ研究が生み出されることが期待される。

キーワード：構造主義、ポスト構造主義、文献レビュー、フーコー

key words : structuralism, poststructuralism, literature review, Foucault

I . はじめに

人間は確固たる自我や主体をあらかじめ持っている存在である—「自分らしさ」や「主体性」が称揚される現代を生きる私たちの多くが、このような考えを持っているのではないだろうか。これまでの看護学でも、人間は確固たる主体をあらかじめ持っている存在であるという（しばしば暗黙の）前提に立つ研究が国内外問わず多数発表されてきた。しかしながら、「人間の中に確固たる主体が存在する」という考えが、遅くとも1970年代にはすでに西洋思想の主流から外れたものとなっていたという事実がこれらの研究者たちにはあまり知られていないように見受けられる。

人間の中に確固たる主体は存在せず、むしろ「人間の自我や主体はそれぞれの人間の中にはじめから存在

するものではなく、人間を取り巻く社会構造から影響を受けてはじめて形成される」と考える立場は構造主義もしくはポスト構造主義と呼ばれ、20世紀後半からフランスなど西洋諸国を中心に影響力を強めていき現在は主流となっている思想・哲学上の潮流である。海外の看護学研究では、西洋思想におけるこうしたトレンドの変化を研究の前提にも反映させようとして、構造主義やポスト構造主義の観点から議論を行う研究が1990年代ごろから登場している。その一方、本邦看護学では、構造主義やポスト構造主義の理論を明示的に用いた研究はこれまでのところほぼ皆無といえる。だが、多くの人々が「当たり前」と認識してきた事象や事物が全く「当たり前」でないということを明らかにしようとする構造主義やポスト構造主義の観念に立つことで、従来とは大きく異なる発想に基づく

斬新な研究成果が生み出される可能性がある」と本稿は考える。

そこで本稿では、まず構造主義およびポスト構造主義の解説を行う。次に、海外の看護学研究で構造主義もしくはポスト構造主義の観点に立脚したものをレビューする。最後に、以上の議論を受け、構造主義やポスト構造主義の本邦での看護学研究における適用の展望について論じていく。

Ⅱ．構造主義およびポスト構造主義の説明

1. 構造主義

ルネサンス期以後の西洋の思想では、揺るぎない自己同一性を確立した自由な自我や主体が人間の中に存在することが（半ば暗黙の）前提とされてきた。さらに、社会は確固たる主体を持つ人々から構成される、別の言い方をすれば「主体が社会構造を形成する」という考え方が常に優勢であった（橋爪, 1988, pp.161-162; 内田, 2002, p.157）。

第二次大戦後に西欧で流行した実存主義も、このような前提や考え方に基づく思想である。その代表的論者で哲学者の J.-P. Sartre は、確固たる主体を持つ人間は自らの決断により常に正しい選択を行うことができるため、現在から過去を振り返れば人間により形成される社会は必ず進歩しているはずである（「歴史の直線的推移」が存在する）と主張した（橋爪, 1988, p.127; 内田, 2002, pp.81-82）。

だが、文化人類学者の C. Lévi-Strauss は Sartre の主張を全面的に否定した。Lévi-Strauss は、Sartre らの主張もあって当時の西洋において「未開な」「遅れた」社会であるとみなされていたブラジル原住民社会にも、西洋社会と引けを取らないほど複雑で高度な社会構造が存在していることを明らかにした。そして、両者の違いはそれぞれの世界観の違いにより生じているのであって、Sartre が述べるように西洋社会が歴史的・文化的に「進んだ」段階にあるために生じているのではないと主張した。Lévi-Strauss の批判により実存主義は西洋思想の主役の座から転落し、実存主義に代わって Lévi-Strauss を代表的論者とする構造主義が新たに西洋思想の中心を占めるに至った（橋爪, 1988, p.129; 内田, 2002, pp.146-150）。

ここで構造主義の内容を説明しておく。構造主義では、人間は実存主義で想定されていたほど自由な存在ではないと考える。人間は常に自分が属する社会集団や自分が生きる時代に拘束された存在であり、社会集団や時代により物の見方・考え方が無意識のうちに

方向づけられていると考えるためである（橋爪, 1988, p.127; 内田, 2002, p.25）。別の言い方をすれば、「社会構造が主体を形成する」のである（内田, 2002, p.157）。

構造主義では、人間主体の「意識」や「思い」も、主体に先立って存在している社会構造に由来する「無意識」により規定されると考える。また、人間が日々経験する身体経験のとらえ方（「肩が凝る」など）についても、人間の物の見方・考え方を規定し、さらに社会集団や時代により内容が変化するという点で「無意識」と類似した性質を持つ「言語」に規定されていると考える（橋爪, 1988, p.190; 内田, 2002, pp.59-75）。

構造主義の考え方は西洋思想で一般的なものとして受け入れられるようになった一方、その限界を指摘する声もあがるようになった。構造主義の考え方では、現実の社会で生じることがある（社会）構造の変化をうまく説明できない点や、人間が持つ主体性があまりに軽視されているといった点が主に批判された（千葉, 2022, p.24; 橋爪, 1988, p.224）。そこで、構造主義の考え方を基本的な前提としつつも、その限界を克服しようとするポスト構造主義と呼ばれる一連の思想が生み出されていった。

2. ポスト構造主義

ポスト構造主義の代表的論者としては、いずれも哲学者の J. Derrida や M. Foucault が挙げられる（Prasad, 2005/2018）が、それぞれの思想をここで説明する。

Derrida は、相反する2つの概念の対立、すなわち「二項対立」の構造を突き崩す「脱構築」を提唱したことで知られる。私たちは日常生活の中で遭遇する様々な事物を、例えば「自然－人工」「オリジナル－コピー」といった二項対立の構造により（しばしば無意識的に）分類している。さらに、二項対立のうち片方は「良いもの・優れたもの」で、もう片方は「悪いもの・劣ったもの」であるという価値判断を（これもしばしば無意識的に）行っている。Derrida は、人間が「良い・悪い」「優れた・劣った」などの判断をするには、常に何らかの判断基準や価値観が必要となることに着目した。そのため、一般に「悪い・劣った」と考えられがちな事物であっても、それを一般的なものとは異なる判断基準や価値観から見直してみれば「良い・優れた」と判断できるようになる局面が必ず存在するはずである。そうだとすれば、もはや二項対立においてどちらが「良い・優れた」「悪い・劣った」と明確にいうことはできなくなり、さらに二項対立を構成する2つの概念の境界もあいまいになってくる。以上のように

な「脱構築」の思考プロセスが人々の間で広まっていくことで、二項対立の前提となっている(しばしば人々の間で無意識のうちに共有されてもいる)価値観を揺さぶることができ、さらには二項対立の構造を変化させ、この構造から生じる秩序をも解体することができるとした(千葉, 2022, pp.25-44)。

Foucault は、人間が主体を形成するためには社会に存在する何らかの秩序や規範(「規律」)を受け入れ、この規律に従属する必要があるとする「主体化=従属化」の議論を展開した。現代の社会は特定の指令者がいないにもかかわらず機能し存続しているが、社会がこのようなかたちで存続し続けるためには社会を構成するすべての人々がいつも自発的に規律に従い行動することが必要である。そのため、人間が社会に参加しようとする(主体となる)際には、「社会の一員となるにふさわしい精神」として社会の規律を受け入れ、この規律を無意識のレベルにまで定着させることが必要となる。その過程では、医学や心理学など「人間に関する科学」の知識が社会の側で重視され、主体を形成しようとする人間の精神の規律化が身体の訓練という方法をとって行われるが、方法の具体例としては学校での号令やさまざまな身体所作(行進、気を付けなど)があげられる(石田, 2010, pp.150-164; 中山, 1996, pp.140-143)。

このように、社会の規律を受け入れて無意識のレベルにまで定着させることで、人間ははじめて主体となると同時に自発的に社会の規律に従う存在になっていく(主体化=従属化)が、主体となった人間の「欲望」もまたこの規律により規定される。人間の自発性を最もよく駆り立てるのは、無意識化された内発的な欲望だからである。人間が最も強く主体性を発揮するのが「無意識化された・内発的な」欲望を追求する場面だが、この欲望も元は社会構造に規定されたもの、すなわち「その社会で多くの人が欲しいと思っているものを自分も欲しくなる」のである(中山, 1996, pp.167-170; 内田, 2002, p.103)。

3. 看護学における構造主義およびポスト構造主義の受容

1960年代から70年代にかけての世界的な社会運動の活発化と時を同じくして、人種やジェンダーなど個人の生まれ持った属性による構造的差別の存在が社会的にも学問的にも問題視されるようになった。看護学も含めた当時の学問分野の多くでは、当時主流であった実証主義や、人間の主体や意識を絶対視する伝統的

西洋思想(実存主義や現象学など)が構造的差別の解消には無力であったことへの批判から構造主義が注目を集めるようになった。しかし、構造主義の考えからでは構造的差別を覆す道筋が見出せず、また現実には生じることがある社会構造の変化も説明できないことが徐々に明らかになってくると、これらの限界を克服しようとする思想として90年代に入り海外の看護学ではポスト構造主義が新たに注目されるようになった(Browne 2001; Francis 2000)。

ポスト構造主義の思想およびこれに基づく海外の看護学研究は、①ある特定の研究手法のみが「科学的」であるとして他の研究手法に比べ過大評価されてきた結果、研究手法間で「科学的」であるか否かによる二項対立的なヒエラルキーが生じたこと、②「科学的」とされる研究手法でもテーマ選択や研究対象となる事物・事象に対する認識などで著者による主観が入り込む余地があるため、「中立的立場」や「完全に客観的な視点」からの研究は不可能であること、③「科学的」とされてきた特定の研究手法による研究成果ばかりが蓄積されていった結果、社会的マイノリティ・弱者に関して社会環境からの自律性の高さが実態以上に強調される(構造的差別や貧困が健康に与える影響が過小評価される)などの「バイアス」が生じたこと、を明らかにしたうえでこれらの「バイアス」に修正を迫る研究成果を公表してきた(Francis 2000; Holmes & Gagnon 2018)。

しかし、筆者の知る限り本邦看護学でこれらの研究成果はほぼ参照されていない。近年の本邦では貧困の拡大が指摘され、またジェンダーやセクシュアリティなどによる構造的差別の解消への機運も高まりつつある。そこで本稿では、ポスト構造主義およびその理論的前提を一部共有する構造主義が海外の看護学研究でどのように用いられているかを明らかにするとともに、国内での看護学研究におけるこれらの理論の適用可能性を検討する。

Ⅲ. 研究方法

1. 文献検索の方法

システマティックレビューに準じた方法で検索を行った。PRISMA-S 声明(Rethlefsen et al., 2021)に準じ、PubMed と CINAHL を用いた検索を実施した。検索条件は

「nurs*」(nurs で始まる単語) and 「structuralism or post-structuralism or poststructuralism or Levi-Strauss or Derrida or Foucault」… (※)

とし、2022年までに発表（online first版を含む）された英語の原著論文とした。検索条件を満たすもののうち、①要旨および全文が検索実施時点で確認可能なものをレビュー対象論文とした。そのうえで、②タイトルおよび要旨で内容のスクリーニングを行い、原著でないもしくは看護学的内容でない（掲載誌が看護学のジャーナルでなく、かつ看護職者や看護教育に関わる人々や、看護の対象となる人々についての研究でない）と判断された論文をレビュー対象から除外した。加えて、③本文を精読し、構造主義もしくはポスト構造主義

の手法を用いていない論文をさらにレビュー対象から除外した。以上の①から③のプロセスを経て、レビュー対象論文を選定した。検索は2023年2月19日に行った。

2. 検索結果とレビュー対象文献の絞り込み

まず上記検索条件（※）を満たす論文を検索した結果、合計404件の論文がヒットした。そのため、上記①から③のプロセスに加えて、新型コロナウイルス感染症（COVID-19）の世界的流行により看護を取り巻

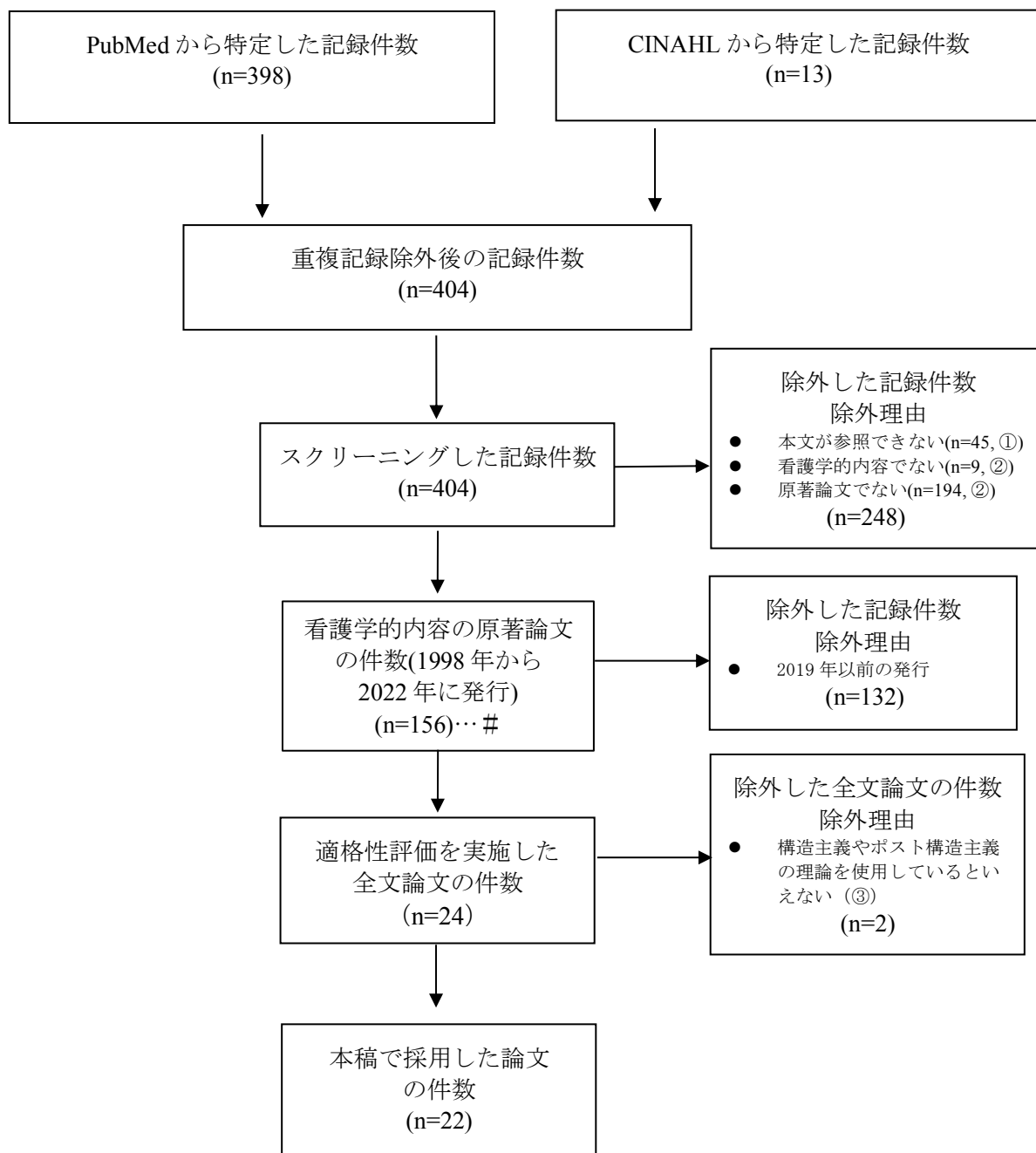


図1 論文選択のフロー

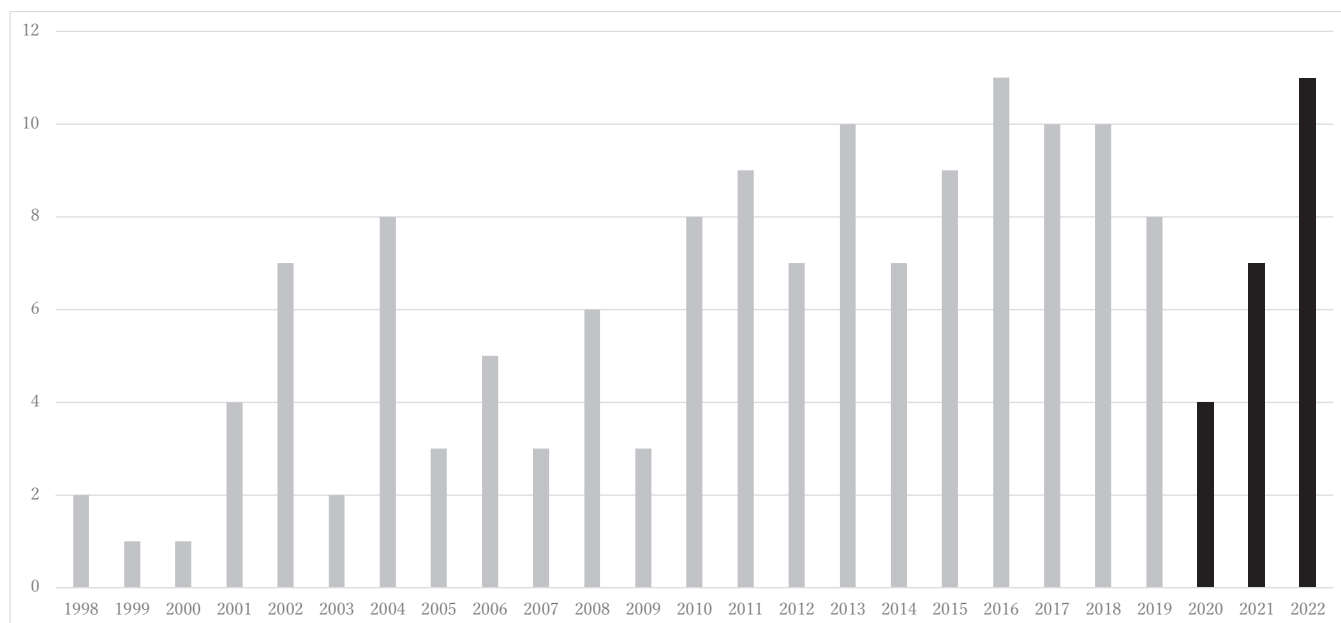


図2 年ごとの発行論文数

(n=156 縦軸は件数、横軸は発行年を示す。黒色の棒グラフが今回レビュー対象とした部分で、灰色の棒グラフはレビュー対象から除外した部分を示す)
 注：文献絞り込みプロセス③（構造主義もしくはポスト構造主義の手法を用いていない論文を除外）でレビュー対象から最終的に除外された論文計2件も黒色の棒グラフの部分に含まれている

く環境が大きく変化して以後の最新の研究動向を反映した論文のみを対象を絞り込むことを目的に、2019年以前に発行された論文もスクリーニングの過程でレビュー対象から除外し論文選定を実施した（図1）。なお、2019年以前も含めた年ごとの発行論文数（図1で#の段階に該当）は図2の通りである。

IV. 結果

すべての選定プロセスを経て最終的に選定された論文は、2020年から2022年までに発行された22件であった。さらに各論文の内容から、それぞれの論文で構造主義もしくはポスト構造主義の理論がどのように用いられているかに基づいた分類を行い表にした。以上の概要を表1に示す。

1. 研究実施国の地理的特徴

筆頭著者の所属機関所在国は、カナダ9件、ブラジル4件、デンマーク2件、スウェーデン2件、オーストラリア2件、米国1件、ノルウェー1件、南アフリカ1件であった。カナダ、ブラジル、北欧諸国での研究が大半を占めた。

2. 構造主義もしくはポスト構造主義理論の用いられ方

対象論文すべてがポスト構造主義の理論を用いてお

り、構造主義の理論を用いた論文はなかった。ポスト構造主義理論の中でも特に多く用いられていたのがFoucaultの理論や研究手法で、対象論文のうち15件で彼が提示した様々な分析概念や手法が採用されていた。ほかに用いられていた理論で多かったのはポスト構造主義フェミニズムで、4件の論文で採用されていた。ポスト構造主義以外の理論とポスト構造主義を併用した研究も2件あり、そのうち1件は現象学、もう1件は社会的アイデンティティ理論と併用していた。

3. 研究テーマ

対象論文を研究のテーマで分類したところ、最も多数を占めたのが性的マイノリティや女性（母親）、民族的（エスニック）マイノリティなど「社会的マイノリティ・弱者」に分類されることが多い人々に関するもので11件（Aston et al. 2021; Carson et al. 2021; Domingue et al. 2022; Gultekin et al. 2022; Hantke et al. 2022; Joy et al. 2020; Joy et al. 2022; Morris et al. 2021; Pinto et al. 2022; Ueland et al. 2020; Zago et al. 2022）が該当した。次に数が多かったテーマは看護師と他職種、もしくは看護師と看護の対象者という、対等であるべきとされる人々の間での「支配・被支配関係」に関するもので5件（dos Passos Aires et al. 2022; Eivergard et al. 2021; Evans et al. 2020; Macdonald 2022; Silva et al. 2022）が該当した。コロ

表1 レビュー対象論文の概要

社会的マイノリティ・弱者					
筆頭著者名、発行年	実施国	目的	対象者、データ取得方法	分析に用いた理論や手法：ポスト構造主義の適用で明らかにされる内容	研究の結果
Aston, M. (2021)	カナダ	カナダで（精神疾患などにより）公的児童保護サービスを受けている初産婦がどのようにして育児に関する情報やサポートを得たのか、またその際にどのような社会的困難を経験したのか明らかにする	子どもを持つ女性5名、半構造化インタビュー	ポスト構造主義フェミニズム：「良い母親」に関する社会規範に影響を受けている）医療従事者から受ける偏見により、対象者たちがどのような困難に直面したのか明らかにする	対象者たちは「良い母親」としての社会規範に反する性質を持っていたため、医療従事者からのスティグマやステレオタイプにさらされ、母親として扱われないこともしばしばあった。そのため、育児に必要な情報やサポートを公的に提供してもらえず、自力で探さざるを得ないこともあった
Carson, A. (2021)	カナダ	不妊治療がうまくいかなかった女性が治療の中止を決断するまでのプロセスを明らかにする	不妊治療を受けた経験があるが功を奏さず現在は受けていない女性22名、半構造化インタビュー	ポスト構造主義フェミニズム：不妊治療を中止することに関して、対象者たちが「女性」に関連する社会規範からどのような影響を受けたのか明らかにする	対象者たちは、社会に存在する「女らしさ」や「母性」の規範に縛られ、不妊治療中止の決断に困難を感じていた。治療の過程で、治療がうまくいかない原因を（社会規範により）対象者に求める医師から、配慮に欠ける対応を受けた対象者もいた
Domingue, J.-L. (2022)	カナダ	カナダの司法精神医学の場で、精神疾患のために罪に問われなかった(UST/NSR)人物が公的に「危険人物」へと仕立て上げられるプロセスを明らかにする	司法精神医学看護師6名と UST/NSR の人4名、インタビュー・審査委員会傍聴・公文書閲覧	Foucault などの理論を用いた批判的エスノグラフィー：看護師も関与する司法精神医学の場で、偏見を持たれやすい UST/NSR の人々がどのようにして「危険人物」とされていくのか明らかにする	司法精神医学看護師の役割は公衆衛生保健師と同様に地域住民を「危険」から守ることだが、司法精神医学での「危険」の基準には公衆衛生よりも人間の主観が入り込みやすい。そのため、UST/NSR の人々への偏見もあり、司法精神医学看護師はこれらの人々を過剰に「危険人物」視している可能性がある
Gültekin, E. (2022)	デンマーク	デンマークの医療現場で、民族的マイノリティの患者や家族が医療従事者によってどのように表現されているのかを分析する	2006年から2019年の間に発行されたデンマークの看護雑誌 (Danish Journal of Nursing)、オンラインアーカイブ検索	Foucault の言説分析法：民族的マイノリティの患者や家族に関してどのような言説が展開されてどのような偏見が付与されるに至ったのか、雑誌記事を分析し明らかにする	民族的マイノリティの患者や家族は看護師にとって「迷惑」な存在であることが強調されていた。これらの患者や家族が人種や文化の面で多様性とは無関係に「迷惑」な存在として一括りにされる結果、医療機関を受診する際に不利益を被る恐れがある
Hantke, S. (2022)	カナダ	カナダの看護大学で、反人種差別教育が導入された後の白人教員が社会構造的な人種差別の残存を助長するような言動を学内でどのように行っているか分析する	白人の看護教員3名、フォーカスグループインタビュー	ポスト構造主義言説分析：白人教員がどのような背景から（無意識的に）社会構造的な人種差別の残存を助長するような言動をとっているか、インタビューデータから明らかにする	白人教員たちは現在のカナダ社会が白人に有利であることを意識していないため、自分の無意識的な言動が社会構造的な人種差別の残存を助長する可能性を全く認識しておらず、人種差別は他人事として認識していた。反人種差別教育をさらに徹底する必要があると見出された
Joy, P. (2020)	カナダ	コロナ禍における初産後の母親の体験を調査する	新生児を持つ母親68名、オンラインアンケート（自由記述式）	ポスト構造主義フェミニズム：コロナ禍での初産後の母親の体験に、「初産後の母親」に対する社会からの偏見がどう影響したのか明らかにする	コロナ禍で家族以外との接触が減少したことで他人から「完璧な母親」像を押し付けられる場が減るなど良い面もあったが、一方で保健所からの隔離命令などにより「完璧な母親」としての役割を果たせないという悩みも抱えていた
Joy, P. (2022)	カナダ	カナダの性的マイノリティ (2SLGBTQ+) の人々は、どのようにして「思いやりのある医療」へのアクセスを拒否されるのか分析する	性的マイノリティの人20名、オンライン半構造化インタビュー	Foucault の言説分析法：異性愛者で性自認が明確であることを「正常」とする社会規範の存在によって、対象者たちが医療の場でどのような差別や偏見に遭遇しているのか明らかにする	異性愛者で性自認が明確であることを「正常」とする社会規範の影響で、対象者たちは医療機関受診の際に「思いやり」に欠ける差別的対応を受けただけでなく危険な経験もしていた。また、彼らが抱える精神疾患も、その原因を上述の社会規範の存在ではなく彼ら自身に求められるという偏見を受けていた
Morris, S. (2021)	オーストラリア	逆子出産を経験した女性が、出産までの過程でどのような経験をしてきたのか明らかにする	逆子出産を経験した女性20名、半構造化インタビュー	Foucault の規律権力理論に基づく記述的探索法：逆子を妊娠した妊婦が出産までの過程の中で、出産に関する社会規範にどう影響を受けてきたか明らかにする	今日でも逆子の経産分娩を危険視する偏見は社会だけでなく医療従事者の間でも根強い。その結果としてマスメディアや医療従事者の働きかけを受けた妊婦の多くが帝王切開を行うよう誘導され、もともと同意に反して帝王切開を行っていた
Pinto, P. (2022)	南アフリカ	看護教育カリキュラムに LGBT ヘルスケアの観点を導入することで、看護学生は LGBT の人々に適切なケアを提供できるようになると一般に考えられているが、南アフリカの事例からその考えの妥当性を検討する	看護大学の学生51名、フォーカスグループディスカッション	Foucault の言説分析法：異性愛を「正常」とする社会規範の存在が、学生による LGBT 教育の受容にどう影響しているか明らかにする	学生たちの間では異性愛を「正常」とする意識が社会規範の影響で依然として根強い。LGBT 教育の内容を実践することへの抵抗を示す学生が数多くいた。LGBT の人々への適切なケアに関する教育だけでなく、学生の意識改革を促す教育も今後は必要である
Ueland, V. (2020)	ノルウェー	現代のノルウェーで社会からのスティグマに苦しむ肥満の人々は、どのような願望を持っているのか明らかにする	BMI が 30 以上の人 18 名、半構造化インタビュー	人間の身体と文化的規範に関する Foucault の理論および現象学：肥満を望ましくないとする社会規範の存在により、対象者の自己認識や社会生活にどのような影響が生じているか明らかにする	肥満により社会的にも身体的にも生活に困難を抱える対象者たちは、「普通の生活」を強く望んでいた。「普通の生活」は痩せることでしか実現できないが、「痩せた身体」は社会が規範とする身体でもある。この規範から逃れるため、彼らは「自分の人生を自分の言葉で創造する」ことを強く望んでいた
Zago, P. T. N. (2022)	ブラジル	（看護師も実行に携わる）ブラジルの結核対策ガイドラインは「健康の社会的決定要因」に触れていないなど社会的弱者に不利な内容であるが、このガイドラインがどのような背景から生み出されたものなのか批判的に分析する	2002年から2019年に発行されたガイドライン5冊、文献検索	Foucault の言説分析法：政府が結核対策に関してどのような考えを広めて人々との社会規範にしようとしているのか、その内容や意図を明らかにする	ガイドラインの分析から、社会的弱者への（医療的手段ではない）社会政策的な手段による介入を回避したい政府の意図が見てとれた。ガイドラインは結核対策で自己責任の原則を強調しており、さらにその原則が医学的見地から当然のものであるかのように読み手の考えを誘導しようとしていた

構造主義およびポスト構造主義を用いた看護学研究の海外動向：看護を新たな視点から見るために

支配・被支配関係

dos Passos Aires, L. C. (2022)	ブラジル	ブラジルでカンガルーマザーケアの普及に携わった医療チームスタッフの間で、普及の過程でどのような力関係の変化があったのか分析する	医療従事者 12 名(看護師 5 名、医師 4 名、心理士 1 名、作業療法士 1 名、ソーシャルワーカー 1 名)、半構造化インタビュー	Foucault が提唱した系譜学的分析法：各医療従事者が、自らの持つ専門知識をチーム内で普及させることと権限の強化(あるいは維持)をどのような方法で結びつけていたのか明らかにする	多職種連携がカンガルーマザーケアの普及には必要であり、看護師は連携の場において専門知識により権限を拡大するだけでなく職種間連携の強化でも重要な役割を果たしていた。しかし、一部の医師は医学的専門知識を盾にカンガルーマザーケアの臨床での実践に抵抗した
Eivergård, K. (2021)	スウェーデン	精神科病棟長期入院患者に関する医療職員の言説においてどのようにジェンダー規範が生み出され、さらにその規範が院内でどのような影響を及ぼしたか分析する	精神科病院医療職 25 名(男性 7 名、女性 18 名)、ミーティングの録音	Foucault の言説分析法：院内での規範や目に見えにくく巧妙な支配・被支配関係が、職員たちの言説によりどのように形成されていったのか明らかにする	職員たちは、患者の院内での行動を職員にとって好都合な方向に誘導するためにジェンダー規範を生み出していた。その結果、職員によるケアが患者を「条件付け」するものとなり(ケアが職員の望む言動を患者にとらせるための手段と化し)、職員による患者の支配につながる恐れがある
Evans, A. E. (2020)	オーストラリア	長期滞在型精神科リハビリテーション施設入所者の性的欲求と行動に対して施設の医療従事者がどのように対処し、どのように解決策が構築されたかを分析する	施設の医療従事者 11 名と入所者 10 名、半構造化インタビュー	Foucault の規律権力理論：入所者が「問題行動」を起こすことを望まない医療従事者側が、入所者の施設内での性的行動をどのような方法により巧妙に支配・管理していたのか明らかにする	医療従事者側のパターナリズム的発想により「入所者をリスクから守る」という言説が施設内で優勢となり、この言説を口実に医療従事者は入所者が性的行動を自粛するよう促すような方法で管理・支配した。入所者は自由で対等な主体として扱われず、むしろ監視や保護の対象として扱われていた
Macdonald, D. (2022)	カナダ	カナダでは助産師と看護師が自律した別々の専門職となっているが、出産ケアの提供において両者がどのように連携しているのか探る	出産ケアに関わる人々 17 名(助産師 5 名・看護師 6 名・母親 2 名・その他関係者 4 名)、半構造化インタビュー	ポスト構造主義フェミニズムによる言説分析：助産師と看護師の協働のあり方が、どのようにしてジェンダーに関する社会規範に影響されているのか明らかにする	助産師と看護師は、主に個人レベルでの信頼関係構築などを通じて柔軟な業務対応を行っていた。ジェンダー規範の影響により男性医師主導で女性医療職が従属する関係になりがちな古典的医療チームとは異なり、今回研究対象としたチームのメンバーは全員が女性であるため、メンバー間でのヒエラルキーもなかった
Silva, I. S. (2022)	ブラジル	ブラジルのファミリーヘルsteam(FHT)における看護管理は、看護師とコミュニティヘルスワーカー(CHW)の間でどのような関係のもと行われているのか探る	CHW 22 名・看護師 6 名・看護補助者 10 名、半構造化インタビュー	Foucault の規律権力理論に基づく記述的探索法：多職種で構成される FHT という組織で、看護師がどのようにして他職種にチーム規範への自発的従属を促し、チームの管理をしているのか明らかにする	チーム内での看護管理は、看護師から他職種への一方的な監視を伴う一方、メンバーの心理的安全性を保障することでメンバー間での積極的対話を促し、職種間でのヒエラルキーや他職種の不満を解消するものになっていた。こうした方法が他職種におけるチーム規範の内面化と自発的従属を促していた

ヒーローとしての看護師像

Boulton, M. (2021)	カナダ	カナダの看護師はコロナ禍で「ヒーロー」として扱われることが多かったが、このことが社会による看護師の抑圧につながっていないか検討する	2020 年 3 月から 6 月までのカナダの主要新聞 3 誌の記事、データベース検索	Foucault の言説分析法：看護師を「ヒーロー」とする言説がどのようにして社会に広まっていき、看護師を抑圧するものになっていったのか明らかにする	看護師を「ヒーロー」視する言説は、看護師の自己犠牲を当然視する風潮と裏表で広まった。その結果、看護師は職場や政府などから何も支援を受けなくても当然だとする風潮が社会に広まっていった
Mendes, M. (2022)	ブラジル	コロナ禍のブラジルでは、看護師は「天使」や「ヒーロー」という称号を社会から与えられることがあったが、看護師たち自身はこのことをどう感じていたのか調査する	看護師 16 名、ブラジル・Alagoas 州看護地域協議会の Web サイト上で看護師にコロナ禍での体験を語るビデオのインスタグラム投稿を募集	Foucault の言説分析法：コロナ禍の社会で看護師を「天使」や「ヒーロー」とする言説が広まったが、その背景には社会から看護師に対するどのような認識があり、またその認識は看護師たち自身の認識とどう異なるのか明らかにする	「天使」や「ヒーロー」という称号には、どんな逆境にも耐えて自己犠牲のもと人々を救うという社会からの一方的なイメージが投影されていた。そのため看護師たちは「天使」「ヒーロー」という称号を歓迎しておらず、むしろ「自分たちは普通の人間であり看護の専門家である」という認識を社会に求めている
Mohammed, S. (2021)	カナダ	コロナ禍のカナダ・米国・イギリスで看護師は社会から「ヒーロー」とのレッテルを貼られてきたが、このレッテルが看護師にどのような社会的・文化的・政治的影響を及ぼしたのか分析する	2020 年 3 月から 8 月の間のマスメディア(新聞・雑誌、SNS、企業広告など)での関連記事、データベース検索	ポスト構造主義による言説分析：看護師を「ヒーロー」とする言説がコロナ禍の社会でどのような機能を果たし、看護師たちにどのような影響を及ぼしたのか明らかにする	看護師を「ヒーロー」とする言説は、「看護師は模範的な人間の持ち主でなければならない」「看護師は労働環境について文句を言うべきでない」という規範の強要を行ったり、看護師が危険にさらされることを正当化したりするための手段として社会の人々に利用され、結果として看護師を抑圧していた
Sahay, S. (2022)	米国	コロナ禍の米国では看護師が「ヒーロー」という称号を社会から与えられることがあったが、このことが看護師のアイデンティティや業務にどう影響したか分析する	看護師 23 名、半構造化インタビュー	ポスト構造主義および社会的アイデンティティ理論：社会から「ヒーロー」として扱われるようになったことが、看護師のアイデンティティや日常業務にどう影響したか明らかにする	看護師たちは「ヒーロー」の称号を社会から自分たちが監視されていることの表れとして受け取っていた。また、この称号に社会が付与するイメージは看護師が直面する日常的課題とはかけ離れていた。「ヒーロー」の称号は、看護師の精神面に悪影響を及ぼす恐れがある

その他

Falch, L. A. (2020)	デンマーク	デンマークの病院で看護師が行う業務は時代ごとにどう変化し、その変化が看護師の意識にどう影響してきたのか、1800 年代から現代に至るまで歴史学的に分析する	病院・公文書館・博物館などでの史料入手、病院での参与観察、半構造化インタビュー(入院患者、看護師、医師)	Foucault が提唱した系譜学的分析法：看護師の業務内容を時代ごとに調べるとともに、業務内容の変化が各時代の看護師の意識にどう影響してきたのか明らかにする	看護師は 1800 年代から現代までの間に介助者から治療者・管理者へと立場を変えていったが、同時に看護師の意識はケア志向から医師と同様の疾病志向のものに変わっていった。現代の看護師が持つ意識は、当人たちが主張するような「看護の本質」とは到底いえないことが示された
------------------------	-------	---	--	---	---

Glasdam, S. (2021)	スウェーデン	北欧の看護師を対象とする雑誌では、薬剤耐性菌(AMR)をどのような存在として表現しているか、またその表現方法の背景には雑誌側のような意図があるのかを分析する	北欧3国(スウェーデン、デンマーク、ノルウェー)で看護師労働組合の連合団体が発行する雑誌 11年分の記事、データベース検索	Foucault の「統治性」論に着想を得たテクニカル分析：雑誌記事で AMR がどう表現されているか批判的に分析することで、雑誌側が AMR に関して読者である看護師にどのようなイメージや考えを持たせようとしているのか明らかにする	雑誌記事では抗生物質の乱用(誤用)のみが AMR の原因であると述べられており、問題解決は新たな抗生物質の開発のみによって可能だと述べられていた。また、看護師は医師による抗生物質の乱用に歯止めをかけるべき存在として雑誌の中で描かれていた。読者である看護師が、以上のような考えを持つ主体となるよう促そうとする雑誌側の意図が見てとれた
--------------------	--------	--	---	--	---

ナ禍という時代背景を反映して、「ヒーローとしての看護師像」に関する論文も4件 (Boulton et al. 2021; Mendes et al. 2022; Mohammed et al. 2021; Sahay et al. 2022) みられた。「その他」の論文のテーマとしては、1800年代から現代までの看護師業務の変遷と看護師の意識の変化、看護雑誌での表現内容とその背景にある雑誌側の意図、といったものが各1件 (Falch 2020; Glasdam et al. 2021) みられた。

4. 研究方法

研究方法として最も多かったのは半構造化インタビューで、11件で採用されていた。その他に採用されていた研究方法是多岐にわたり、雑誌や新聞のデータベース検索、会議の傍聴、公文書や史料の閲覧、グループでのインタビューやディスカッション、オンラインアンケート、インスタグラム投稿の分析などがあり、日本国内での看護学研究ではあまり見られない研究方法も散見された。対象論文はすべて質的研究を行っていた。

V. 考察

1. レビュー対象論文の特徴

本稿でレビュー対象とした22件の論文には、3つの大きな特徴が指摘できる。それらの特徴について、ポスト構造主義で展開されてきた議論と関連させて論じていく。

1点目の特徴は、「社会的マイノリティ・弱者」に関する研究が多いことである。この背景には、本稿で先に説明した「脱構築」の視点があると考えられる。

「マイノリティ」や「弱者」と呼ばれる人々の対には必ず「マジョリティ」や「強者」と呼ばれる人々が存在するが、「脱構築」の観点からすると「マイノリティ・弱者」と「マジョリティ・強者」を区別するには常に何らかの判断基準や価値観が必要であるというのは本稿で前に述べた通りである。「脱構築」の手法は、この判断基準や価値観(人々の間で意識化されていないことも多い)の妥当性に疑問を投げかけ、「マイノリティ・弱者」の側への肩入れができるような新

た判断基準や価値観を提示することで両者の間での優劣関係の解消を狙い、その結果として「マイノリティ・弱者」への差別なども解消していくことを可能とするものである。今回レビュー対象とした論文の中に「脱構築」を提唱したDerridaの議論を直接参照したものはないが、哲学者の千葉雅也(2022)によればFoucaultの思想もDerridaとは異なる観点からの「脱構築」の試みとして理解することが可能であるため、今回のレビュー対象論文の中でFoucaultの理論に基づいた研究についても「脱構築」の視点が含まれていると見てよいと考える。今回レビュー対象とした論文では、「脱構築」を実現するためのいわば準備段階として、社会に存在し人々の間で共有されている偏見(看護学生(Pinto et al. 2022)や医療従事者(Joy et al. 2022)の間で存在する性的マイノリティに対する偏見や、民族的マイノリティの患者や家族を一律に「迷惑」な存在とみなす看護師の間での偏見(Gültekin et al. 2022)など)を浮き彫りにしようとしているものが多いといえる。

2点目の特徴は、1点目とも関連するが「正常」「異常」といった社会規範や、社会における偏見や差別の存在を指摘し批判する研究が多いことである。この背景には、「脱構築」だけでなくFoucaultが展開した議論の影響もあると考えられる。

私たちは社会に存在するありとあらゆる事物に不変の「本質」があると考えがちであるが、Foucaultによればこうした考え方は端的に言って誤りである。社会に存在する事物に関して現在の人々が持ついかなる価値観も過去のある時点で歴史的偶然によって誕生したものであり、その誕生以前には存在していなかったためである。Foucault自身が説明に用いた具体例でいえば、同性愛を「異常」とみなす価値観は現代の西洋でも根強いですが、こうした価値観が広まったのはキリスト教の思想が広まった後のことであり、キリスト教が誕生する前の古代ギリシアでは同性愛は「正常」とみなされていた。また、この具体例からもわかるように、ある特定の事物に対して現在の社会で抱かれているイメージの根拠が弱いことを示すためには、その事物に

関して過去の歴史を遡ってみるのが有効な方法であると Foucault は論じている（中山, 1996, pp.31-36; 内田, 2002, pp.79-80）。過去の歴史を遡るという方法をとっている論文（Falch 2020）が今回のレビュー対象にもあるが、当該論文も現代デンマークの看護師の間で「正常」とされている物の見方・考え方について、1800年代にまで歴史を遡ることでその根拠の弱さを指摘する内容であり、Foucault が提唱した方法論に基づいたものであるといえる。

さらに、ある特定の人々について社会で広く共有されるイメージ（偏見）は、広まっていけばいくほど「本質」として独り歩きしやすくなり、結果としてこれらの人々を抑圧するものとなる場合もある（中山, 1996, pp.35-36; 慎改, 2019, p.29）。この観点からの研究といえるのが、コロナ禍で社会に広まった「ヒーローとしての看護師像」が看護師に与える負の影響を分析した4本のレビュー対象論文である。

3点目の特徴は、「目に見えにくい支配・被支配関係」に関する研究が多いことである。この背景には、Foucault が展開した「権力」や「言説」に関する議論の影響があると考えられる。

まずは権力について、Foucault が西欧での刑罰の歴史を例に行った説明を引用する。中世以前の西欧では、国王などの権力者の力を誇示する目的で、公衆の面前での公開処刑など目に見えやすい方法により罪人の処罰が行われていた。しかし近代以降は、監獄に収容して囚人の矯正を図るという方法が公開での処罰に代わる刑罰の主流になっていった。一見すると罪人・囚人にとってはソフトな方向性での変化が生じたように思えるが、Foucault によると監獄での矯正は公開での処罰に比べて巧妙かつ徹底的に囚人の内面を管理する効果を持つ。監獄は囚人ひとりひとりを毎日24時間内面まで管理・監視し社会にとって「従順かつ有用」な人間となるための規律を植え付けることを目的とする施設で、囚人自身による規律の内面化は監獄生活の中で目に見えにくいかたちで徐々に生じていくためである。以上は本稿の前の部分でも説明した「主体化＝従属化」のより具体的な例でもあるが、こうした方法による人々への規律の内面化（社会から人々への「規律権力」の行使と Foucault は呼んでいる）は監獄以外にも学校、軍隊、そして病院など現代の社会では幅広い場所で観察できると Foucault は述べている（千葉, 2022, pp.84-100; 慎改, 2019, pp.115-118）。以上の議論の発想をダイレクトに反映させたのが、「支配・被支配関係」をテーマとする論文のうち、精神科施設

入所者と看護師の関係を分析した論文2本（Eivergård et al. 2021; Evans et al. 2020）であるといえる。

また、現代の社会に特有の巧妙で目に見えにくい支配・被支配関係は、言説（ここでは、「人々の間で流通し『当たり前』のものとして疑われることなく受容されている言葉や考え」のことを指す）のはたらしきにより形成されると Foucault は述べている（慎改, 2019, pp.110-111）。この観点からの研究といえるのが、「支配・被支配関係」に関する論文のうち医療チームを形成する看護師と他職種の間関係を分析した論文3本（dos Passos Aires et al. 2022; Macdonald 2022; Silva et al. 2022）、「社会的マイノリティ・弱者」に関する論文のうちブラジルの結核ガイドラインの分析を行った論文（Zago et al. 2022）、および「その他」のカテゴリーの、看護雑誌の表現とその意図に関する論文（Glasdam et al. 2021）である。

なお、構造主義の理論を用いた研究は、今回レビュー対象とした論文だけでなく2019年以前に公表された論文の中にもなかった。その理由としては、本稿で前に述べたような構造主義の限界を克服しようとして生まれたポスト構造主義の理論が高度に精緻化されたため、今日ではあえて構造主義を用いようとする研究者がほぼ存在しなくなったことが考えられる（Prasad, 2005/2018, p.116）。

2. 構造主義やポスト構造主義を用いた看護学研究の展望

今回レビュー対象とした論文の多くに共通する研究上の特徴をさらに要約すると、「人間の物の見方・考え方はある時代や社会に特有の相対的なもので、時代や社会を超えた絶対的なものではないこと」を前提としたうえで、①社会の中で生活する人々が有する物の見方・考え方に着目する、②ある特定の物の見方・考え方が人々の間に広まる（あるいは広まっている）ことから生じる人々間の関係性に着目する、ということになると考えられる。ここでいう「物の見方・考え方」は無意識的なものが多いが、意識化されている偏見や差別なども含まれる場合がある。普段人々の間で意識化されていない物の見方・考え方を浮き彫りにするためには、Foucault がいうように研究対象の事物について歴史を遡るほか、Lévi-Strauss が行ったように他国や他文化との比較を試みるのも有効な方法であると考えられる。また、社会的な偏見や差別、あるいは目に見えにくい支配・被支配関係の存在を明らかにすることで、看護に携わる者が（特に無意識的・無自覚的

に) 差別や人権侵害を行わないよう促す効果なども研究成果として期待できる。

構造主義やポスト構造主義の観点を研究に導入することで、より深い分析・対象理解につながる場合もある。今回レビュー対象とした論文のひとつである Ueland ら (2020) を例にとってこのことを説明する。当該論文では、現象学に加えてポスト構造主義も用いてノルウェーで肥満の人々が持つ願望を分析している。Ueland らによれば、現象学では人間が身体を通して自分自身の存在を意識するという側面に着目するが、そのプロセスの中で人間は自らを取り巻く環境や周囲の人々の影響を不可避的に受ける。特に現代の西洋では、肥満は自己管理能力の低さの表れであるとされ、肥満者は社会規範に照らして劣った存在とみなされている。身体的特徴ゆえに自らを取り巻く社会から劣った存在として扱われ差別や偏見を受けることは、肥満者の自己認識にも大きな影響を与える。それだけでなく、身体に関する社会規範を受け入れ自分の身体をその規範に合わせていくこと、すなわち痩せることにより、はじめて肥満者は差別や偏見から逃れたという自らの願望を実現することができる。このように、肥満者が自分の身体を通じて自らの存在を意識する際には身体に関する社会規範の存在が無視できないが、現象学の視点のみではこの社会規範を視野に入れた分析を行うことはできず、ポスト構造主義の観点を取り入れることではじめてそうした分析が可能になると Ueland らは述べている。

ポスト構造主義 (や構造主義) は、私たちに「当たり前」と認識されている事物や事象が「当たり前」ではないことを、人間の主体や意識を大きく制約する社会構造や無意識といった要素に着目することで鮮やかに示すことができる理論であるといえる。本稿でここまで展開してきた考察も踏まえていえば、ポスト構造主義や構造主義に基づく看護学研究からは、①「当たり前」だという思い込みが人々の間に広く存在することにより、看護の場で差別や支配を受けてきた人々 (差別や支配を受けている人々ですらそうした思い込みに囚われており、自分が差別や支配を受けていることに気付かない場合もありうる) の解放への道を開く、②これまで誰も正当性を疑わなかった、すなわち「当たり前」だと皆に認識されてきた看護の方法に対して根本から疑問を突き付ける (本稿でレビューした Falch 2020 もその一例といえる)、などといった成果が生み出される可能性がある。

最後に、ここまで本稿で論じられてこなかったポス

ト構造主義の限界について述べる。ポスト構造主義は人々に疑われることなく受容されている既存の秩序を懐疑的にとらえるという発想が根底にあるため、このような発想とは正反対の発想に基づく、文化や時代に影響されない一般的法則性の発見や確立を目指すタイプの研究への適用は難しい。この点がポスト構造主義の限界といえる。

3. 本稿の限界

本稿では、2020 年から 2022 年までに発表された論文のみが分析対象となった。2019 年以前にも多くの論文が発表されており、それらの中には本稿でカテゴライズした枠組みに当てはまらない研究が含まれる可能性がある。

VI. 結論

構造主義やポスト構造主義の理論を用いた看護学研究は海外で豊富な蓄積があり、研究のテーマや手法も日本国内での質的研究に比べると多彩であることが明らかになった。本稿で紹介できた研究は海外での研究蓄積のほんの一部である。とりわけポスト構造主義は、社会的マイノリティや社会的弱者に位置づけられる人々について研究する場合、社会での偏見の存在やその影響を明らかにしたい場合、看護師と他職種や看護の対象者などとの間での支配・被支配関係を明らかにしたい場合などに適した理論である。看護の対象となる人々は社会的マイノリティ・弱者でも多く、さらに近年の傾向として本邦への移民が増加傾向にあること、性的マイノリティの人権擁護やジェンダー平等実現の動きが社会の中で強まりつつあることなども踏まえると、ポスト構造主義に基づいた研究がこれまでほぼ存在しない本邦看護学でこそ今後の研究の余地は極めて大きいといえる。

ポスト構造主義は、現象学などポスト構造主義以外の理論と同時に用いることも可能である。ポスト構造主義や構造主義の導入により本邦の看護学研究に新たな視点や研究手法が持ち込まれ、従来よりも斬新で深みがあるだけでなく、看護に携わる者に対し (特に無意識的・無自覚的な) 差別や人権侵害の防止を促したり、これまで誰も正当性を疑ってこなかった看護の方法に対して根底から疑問を提起したりするなどの効果を持つ研究が生み出されることが期待される。

本研究に利益相反はない。

文献

レビュー対象文献

- Aston, M., Price, S., Paynter, M., Sim, M., Monaghan, J., Jefferies, K., & Ollivier, R. (2021). Mothers' experiences with child protection services: Using qualitative feminist poststructuralism. *Nursing Reports, 11*(4), 913–928.
- Boulton, M., Garnett, A., & Webster, F. (2021). A Foucauldian discourse analysis of media reporting on the nurse-as-hero during Covid-19. *Nursing Inquiry, 29*(3). <https://doi.org/10.1111/nin.12471>
- Carson, A., Webster, F., Polzer, J., & Bamford, S. (2021). The power of potential: Assisted reproduction and the counterstories of women who discontinue fertility treatment. *Social Science & Medicine, 282*. <https://doi.org/10.1016/j.socscimed.2021.114153>
- Domingue, J. L., Jacob, J. D., Perron, A., Pariseau-Legault, P., & Foth, T. (2022). A critical ethnographic perspective on risk and dangerousness in forensic psychiatry. *Nursing Inquiry, 30*(2). <https://doi.org/10.1111/nin.12521>
- dos Passos Aires, L. C., Padilha, M. I., dos Santos, E. K., Lamy, Z. C., dos Reis Bellaguarda, M. L., de Oliveira Alves, I. F., da Rosa, R., & Costa, R. (2022). Power relations and knowledge of neonatal teams in the kangaroo mother care implementation and dissemination. *Revista Da Escola De Enfermagem Da USP, 56*. <https://doi.org/10.1590/1980-220x-reeusp-2022-0200en>
- Eivergård, K., Enmarker, I., Livholts, M., Aléx, L., & Hellzén, O. (2021). Disciplined into good conduct: Gender constructions of users in a municipal psychiatric context in Sweden. *Journal of Clinical Nursing, 30*(15-16), 2258–2269.
- Evans, A. M., Holmes, D., & Quinn, C. (2020). Madness, sex, and risk: A poststructural analysis. *Nursing Inquiry, 27*(4). <https://doi.org/10.1111/nin.12359>
- Falch, L. A. (2020). A career open to the talents—nurses' doing and focus during the history. *Nursing Philosophy, 22*(1). <https://doi.org/10.1111/nup.12336>
- Glasdam, S., Loodin, H., & Wrigstad, J. (2021). Articulations of antimicrobial resistance in trade union financed journals for nurses in Scandinavia – a Foucauldian perspective. *Nursing Inquiry, 28*(3). <https://doi.org/10.1111/nin.12396>
- Gültekin, E., Sørensen, D., & Frederiksen, K. (2022). An inconvenience to the Nurse's Practice: A Foucault-inspired study of ethnic minority patients. *Nursing Inquiry, 30*(1). <https://doi.org/10.1111/nin.12497>
- Hantke, S., St. Denis, V., & Graham, H. (2022). Racism and antiracism in nursing education: Confronting the problem of Whiteness. *BMC Nursing, 21*(1). <https://doi.org/10.1186/s12912-022-00929-8>
- Joy, P., Aston, M., Price, S., Sim, M., Ollivier, R., Benoit, B., Akbari-Nassaji, N., & Iduye, D. (2020). Blessings and curses: Exploring the experiences of new mothers during the COVID-19 pandemic. *Nursing Reports, 10*(2), 207–219.
- Joy, P., Thomas, A., & Aston, M. (2022). Compassionate discourses: A qualitative study exploring how compassion can transform healthcare for 2SLGBTQ+ people. *Qualitative Health Research, 32*(10), 1514–1526.
- Macdonald, D. (2022). Relationships, roles and person-centred practices – collaborative birthing care in Nova Scotia. *International Practice Development Journal, 12*(1), 1–16.
- Mendes, M., Bordignon, J. S., Menegat, R. P., Schneider, D. G., Vargas, M. A., Santos, E. K., & Cunha, P. R. (2022). Neither angels nor heroes: Nurse speeches during the covid-19 pandemic from a Foucauldian Perspective. *Revista Brasileira De Enfermagem, 75*(suppl 1). <https://doi.org/10.1590/0034-7167-2020-1329>
- Mohammed, S., Peter, E., Killackey, T., & Maciver, J. (2021). The “Nurse as hero” discourse in the covid-19 pan-demic: A poststructural discourse analysis. *International Journal of Nursing Studies, 117*. <https://doi.org/10.1016/j.ijnurstu.2021.103887>
- Morris, S., Geraghty, S., & Sundin, D. (2021). Women's experiences of breech birth and disciplinary power. *Journal of Advanced Nursing, 77*(7), 3116–3131.

- Pinto, P., Macleod, C. I., & Nhamo-Murire, M. (2022). The binary order of things: A discursive study of nursing students' talk on providing, and learning about, LGBT patient care. *Journal of Homosexuality*, 70(10), 1979–2010.
- Sahay, S., & Dwyer, M. (2022). I am not a 'hero': U.S. nurses' identity overlaps and conflict during COVID-19. *Health Communication*, 38, 1–12. <https://doi.org/10.1080/10410236.2022.2088021>
- Silva, I. S., Mininel, V. A., & da Silva, J. A. (2022). Nursing supervision: Interfaces with power relations in Family Health. *Revista Da Escola De Enfermagem Da USP*, 56. <https://doi.org/10.1590/1980-220x-reeusp-2022-0034en>
- Ueland, V., Dysvik, E., & Furnes, B. (2020). Living with obesity: Expressions of longing. *SAGE Open Nursing*, 6. <https://doi.org/10.1177/2377960819901193>
- Zago, P. T., Maffaccioli, R., Riquinho, D. L., Kruse, M. H., & Rocha, C. M. (2022). Treatment adherence under the Foucauldian perspective: Knowledge/powers in tuberculosis control manuals in Brazil. *Revista Gaúcha De Enfermagem*, 43. <https://doi.org/10.1590/1983-1447.2022.20210075.en>
- 引用文献
- Browne, A. J. (2001). The influence of liberal political ideology on nursing science, *Nursing Inquiry*, 8, 118-129.
- 千葉雅也 (2022). 現代思想入門, 講談社.
- Francis, B. (2000). Poststructuralism and nursing: Uncomfortable bedfellows? *Nursing Inquiry*, 7, 20-28.
- 橋爪大三郎 (1988). はじめての構造主義, 講談社.
- Holmes, D. & Gagnon, M. (2018). Power, discourse, and resistance: Poststructuralist influences in nursing, *Nursing Philosophy*, 19, e12200. <https://doi.org/10.1111/nup.12200>
- 石田英敬 (2010). 現代思想の教科書 世界を考える 知の地平 15 章, 筑摩書房.
- 中山元 (1996). フーコー入門, 筑摩書房.
- Prasad, P. (2018). 質的研究のための理論入門 ポスト実証主義の諸系譜 (箕浦康子監訳) ナカニシヤ出版.(Original work published 2005)
- Rethlefsen, M. L., Kirtley, S., Waffenschmidt, S., Ayala, A. P., Moher, D., Page, M. J., Koffel, J. B., & Prisma-S Group (2021). Prisma-S: An extension to the PRISMA statement for reporting literature searches in systematic reviews, *Systematic Reviews*, 10. <https://doi.org/10.1186/s13643-020-01542-z>
- 慎改康之 (2019). ミシェル・フーコー 自己から抜け出すための哲学, 岩波書店.
- 内田樹 (2002). 寝ながら学べる構造主義, 文藝春秋.